

広島大学のある西条盆地には多くの自然が残っている。私たちの研究室で1年間にわたって調べた結果では、環境省が絶滅危惧種として指定している植物が多く生育していることがわかった(表1、グラビア)。これらの種はどのようにして絶滅危惧種としてリストされるまでに減少してしまったのだろうか?

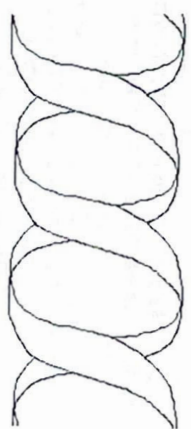
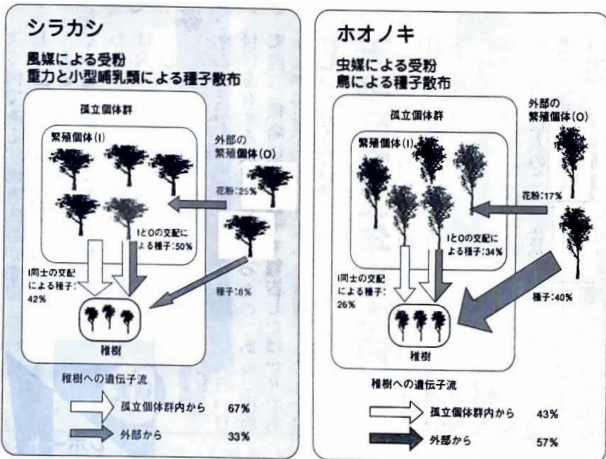
自ら動き回ることも出来ない植物は、花粉と種子によって遺伝子を広めている。植物がどのような大きさの種子からいつ、どのように発芽して、どのように生長し、繁殖を始めるか、そして送粉や種子散布はどのように行われるか、といった項目は植物の生活史特性と呼ばれている。人間が生態系にインパクトを与えたとともに、いち早く消えてゆく種と、いつまでもとどまるところのできる種、あるいは人間のインパクトがあるゆえに繁栄できる種があるが、このように運命の違いを決めているのが、それぞれの種が持つ生活史特性のの違いに他ならない。そして、絶滅危惧種では生活史特性が要求する何らかの条件が開発等による環境の変化により満たされなくなつたに違いない。個体数が少なくなつたが故に、物理

表-1. 広島市の絶滅危惧植物

種名	個体数		100年後の絶滅確率(%)*
	全国	広島県	
キキョウ	20000	>1000	100
カガブタ	30000	>10	90
ヒメタヌキモ	20000	>1000	50
タヌキモ	80000	>1000	80
ムラサキミカキグサ	50000	>100	50
イシモチソウ	9000	>1000	100
オグラノフサモ	4000	>100	100
オグラコウホネ	6000	>100	90
サギソウ	20000	>100	99
トクソウ	40000	>100	60
エヒメアヤメ	1000	>10	20**
マルバオモダカ	5000	>100	100
マルミスアタ	4000	>100	99
スプタ	5000	>100	97
イトモ	30000	>100	90
ヤマトミクリ	10000	>100	90

\*[訂正]日本の絶滅のおそれのある野生生物 植物(2000) 環境庁]による  
\*\*20年後の絶滅確率

図-1. 断片化した森林生態系における遺伝子の流れ



# 遺伝マーカーを使って 生物を保全する

自然環境科学講座 助教授 井鷲 裕司

## 断片化が進む森林生態系

森林は多様な生物の生息地となっており、生物資源の宝庫として価値が高い。しかしながら、地球上のすべての森林生態系は人為による面積の減少、断片化、孤立化を被っている。森林面積の減少や断片化は森林を構成する多くの植物の遺伝的構造や更新過程にどのような影響を及ぼしているのだろうか? この問いかけは、生物や生態系の保全、そして多様性を維持しながら生態系を持続的に管理する方法を考える上で重要なものである。

断片化した森林に生育する孤立した植物集団において、遺伝子がどの程度交流しているのかを明らかにするために、マイクロサテライトマーカーという情報量の多い遺伝マーカーを利用して、対照的な送粉様式と種子散布様式を持つシラカシとホオノキを対象に解析を行って見た。繁殖活動をjしている大きなサイズの個体の遺伝子型を明らかにした後に、林床に生育している稚樹の遺伝子型を比較することで親子判定を行う。稚樹の親が孤立集団内に存在しなければ、稚樹の遺伝子は調査している森林の外側から流れきたと推定できる。このような解析の結果、孤立した森林の外部からの遺伝子の流れが予想以上に多いということがわかった(図-1)。また、花粉や種子が遺伝子交換に占める割合もそれぞれの種特性を反映し、鳥による種子散布を行っているホオノキでは外部から種子の形で多くの遺伝子が稚樹へと伝えられている。

人の目で見るとどちらの種も孤立集団として存在していたのだが、遺伝子レベルでは孤立しておらず、外部の集団と活発に交流していたのである。

生物の保全を考えるには、野外調査や空中写真を利用した分布調査に加えて、遺伝解析も行わなければ、孤立集団の状況に対する正当な評価ができない(図-1)。この例は示している。もちろん、図-1に示した結果は、どのような孤立集団でも遺伝子は交流しているという事を意味するものではない。実際に遺伝子の交流が不可能になり、存続が危うくなっている集団もある。今後の問題として、そのような集団は物理的にどの程度孤立しているのか、あるいは、種のどのような性質が物理的に孤立に対して脆弱であり、遺伝的に孤立をもたらしたのか、といった点について解析を進めなければならないと考えている。

フィールドワークを中心とする生態学研究においても、野外からごく少量のサンプルを持ち帰り、その遺伝子を解析することで、これまでに見えなかった、植物群落が維持されてゆく仕組みが明らかになってきた。もう一つ例を紹介すると、本県は山地に生育する草本であるチヨウヤハチなどが全くない場所であるにもかかわらず、送粉者が活発に行われていることがわかった。一体どのような生き物が、いつ花粉を運んでいるのか、いまだ疑問のままだが、今まで考えられなかったような意外な生物が送粉者として働いている可能性が高い。こういった、遺伝マーカーを通して野外植物個体群の動態を見ることがいかにエキサイティングであるかは、最近出版された、種生物学会編、「森の分子生態学」、文一総合出版(2001)、をご覧ください。

# 安芸国分寺跡出土の木簡をめぐって

～最近のニュースから～

広域文化研究講座 教授 佐竹 昭

昨年八月末のことである。東広島市文化財センターの国分寺事務所から安芸国分寺跡の試掘溝で木簡が見つかったというお知らせをいただいた。東広島市ではかねてより国指定史跡安芸国分寺跡の土地公有化を進めてきており、歴史公園への整備を計画、その事業にとりもよう試掘調査が行われていたのである。

## 木簡の発見

木簡とは、木札や板を整形して文字を書いたもので内容から文書木簡、記録木簡、荷札木簡などと分類される。役所や個人から出された書類や手紙、物資の出納などを記録した帳簿、荷物に付けられた差出人を示す札などである。それぞれに用途を終えると文字が削り取られて再利用されることもあるが、やがては捨てられる。その際、たまたま良い条件で埋没すると千年以上も原型を保ち、墨で書かれた文字も判読できる場合がある。奈良時代に木簡が多く用いられたのは紙が貴重であったからであるが、用途によつては荷札など木の方が適していたこともある。

さて、お知らせをうけて早速木簡を拝見する。肉眼のほか赤外線テレビでの観察。さらには赤外線スキャナーの利用も試みたが墨が薄くて全てが判読できたわけではない。このとき見つかったのは四点で、佐伯郡（古代安芸国郡の二つ）からの米俵に付されていたであろう「佐伯郡米工斗」と記す長さ一七センチの荷札木簡や、米の支給を記したらしい三九センチもある大きな記録木簡などである。全国的にも国分寺跡で最も多かった木簡の発見は珍しく但馬国分寺に

研究

レポート

## 天平勝宝二年の木簡

現存部分の内容は、「四斗お送りいたします。目さまの分です。持参者（もしくは発送者）は秦人乙磨。この書類を作成したのは佐伯部足嶋時に天平勝宝二年四月二十九日です」というもの。目は、郡から派遣された国司の四番目の地位にある役人のこと。佐伯部は律令制以前に安芸の国造一族佐伯直の支配下にあったことを示す姓で、その肩書き「帳」は郡司の一員である「主帳」を略したものらしい。

つまり、この木簡は、国分寺で行われた法会に安芸国司の目が何かを四斗寄付したのであるが、それを佐伯部足嶋が主帳をつとめる郡から国分寺に届けられた際の送り状ということになる。あるいはもつと単純に、国分寺に滞在していた目のための経費としてその郡から送られたものかもしれない。この木簡は使命を終えたのち表に「之」「秦」などと習書され、廃棄のため意

図的に上端が破砕され、ごみ捨て場、つまり今回調査された土坑（素堀りの穴）に捨てられたようである。

同じ土坑から見つかった木簡は、今では総数で三十点を超える。多くは荷札で「佐伯郡」のほか「沙田郡」（のちの豊田郡）・「高宮郡」・「山方郡」（山原郡）などの郡名がみえ、米や小豆、薦や茵などが送られ、法会のための「鋪設」（会場設営）が計画されている。木簡だけではない。土器に文字を記した墨書土器もたくさん見つかっている。それには「齋会」「安居」などあり国分寺で毎年行われる法会を示している。これらの木簡や土器がほぼ同時に廃棄されたものとすると、すでに天平勝宝二年の段階で国内各郡から物資提供を受け定例の法会を行うなど、安芸国分寺はかなりの整備を経ていることになる。これは、安芸国分寺はもちろん、今までの国分寺研究一般においても新たな発見である。

## 国分寺造営過程の見直し

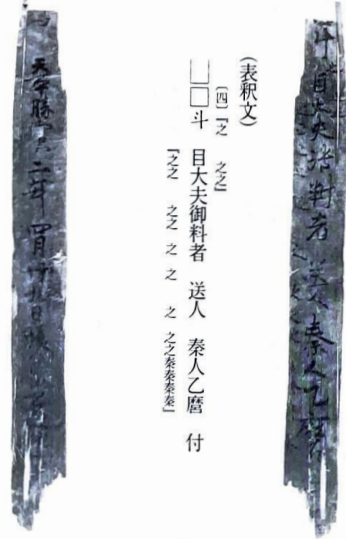
国分寺の名前は一般によく知られているが実際の造営過程についてはほとんどわかっていない。『続日本紀』などによると、天平九（七三七）年三月に国毎に釈迦佛像などを造るよう命じたのが始まりで、天平一三年二月には国毎に僧寺と尼寺を作り水田や封戸を施する総括的な指令が出されている。

る。しかし天平一九（七四七）年一月に国司の意図で造営が進展しないことから郡司たちに造営参加を呼びかけ、天平勝宝八（七五六）歳六月には翌年の聖武天皇一周忌までに佛像・仏殿・塔の造立を間に合わせるよう命じ、さらに天平宝字三（七五九）年一月には「国分二寺政」を諸国に配布している。

政府の命令だけを見るとなかなか造営が進まなかったことがわかり、全国的な国分寺整備はこの天平宝字三年ごろまで降るとい説が有力であった。最近では瓦の様式の研究が進展してもう少し早く考えるようになっていたが、今回の安芸国分寺の事例は天平勝宝二（七五〇）年にさかのぼって主要伽藍の整備を想定させ、また法会などその宗教活動の一端を初めて示してくれたのである。

今回の発見は予想を超えた内容であり、めぐり会えた幸運に感謝するほかない。酷暑・極寒をいとわず黙々と現場で発掘にあたられた調査員や作業員の皆さんの努力のたまものである。しかしこれの内容を正確に把握して意義を明らかにするには私にはまだまだ学習不足である。よほどこちらの耳を澄まさなければ資料の語ることを洩らす

出土した木簡（東広島文化財団センター提供）



（表釈文）  
四斗 目大夫御料者 送人 秦人乙磨 付

（裏釈文）  
天平勝寶 年四月廿九日帳佐伯マ足嶋

# 卒業論文題目紹介

## 人間文化コース

- 森下 真 「倫理の崩壊と展望」  
 FCバルセロナから見る、世界のグローバル化における新たな視点  
 青松 伴晃 「新世紀エヴァンゲリオン」における家族の中の役割  
 有馬 由香 「レイとアスカ、二人の少女」  
 川合 通恵 「映画における子どもと性」—子どもたちの成長に影響する原理を探る—  
 小嶋 佑美 「シュルレアリスムと女性」—レメデイオス・パロを中心に—  
 佐藤 絵美 道化的・カーニバルの世界とラブレ  
 高西 知泰 黒澤明作品論 映画『夢』における黒澤明  
 友成 治由 「遊び論」その原初の姿へ—  
 森田 智子 現代における権力、秩序、多様化—ミシェル・フーコーを通して—  
 矢田 哲也 固有名をめぐって、村上春樹論  
 渡辺 顕 他者論 —「他者」との関わりの可能性—

## 地域文化コース

- 池田 竜也 「千年の愉楽」論  
 沖本 裕一郎 沖縄・現代・文化—オキナワ— アイデンティティ—  
 出来 祐一郎 日本人の飲酒行為に関する考察  
 土井 晋太郎 チベット問題の課題と展望  
 —「グライ・ラマ」命政府チベットの現状から—  
 福島 京 「台湾都市部における食習慣の変化についての考察」  
 —人々の意識の変化を中心に—  
 山田 幸博 「19世紀のアイルランドにおけるケルトの捉え方とその社会的背景」  
 荒木 晴香 「フアアサモアと森林保護」  
 栗田 あや 自民党一党支配の崩壊—小沢一郎の構想と動向を中心に—

- 伊藤 美知子 日本社会における障害観・障害者観の変遷についての考察  
 岩木 恒 「眺望・景観訴訟判例に関する一考察」  
 氏田 いずみ 「紙屋町地下街開発をめぐる政策過程」  
 岡本 英男 「流通業と金融業の融合に関する一考察」  
 奥田 美奈子 「廃棄物・リサイクル関連法の考察」  
 小澤 心 公的関係のパートナーシップの構築について、  
 小野田 真 「石油備蓄管理史におけるOPEC」  
 上山 美和 「犯罪被害者報道の問題点」—報道の自由と名誉・プライバシー—  
 郷原 美由起 「高齢者の社会参加と主観的幸福感に関する考察」  
 齋藤 恵 「松江市におけるアンケート調査を通して—  
 —CIIAの関与が小さい政策決定の事例分析—」  
 辻本 信之 「循環型社会の構築—環境意識の高揚—」  
 藤堂 駒 「障害児の教育制度についての考察」  
 徳永 圭子 「高齢化社会における住民参加型福祉活動に関する考察」  
 西端 千恵 「は鳥居の2つの団体を事例として—  
 —女性とパートタイム労働—」  
 西元 耕世 家庭用ゲーム機のテファクスタスタンダード形成  
 野田 智子 「男性の育児参加とその課題—現代日本家族をめぐって—」  
 梶 耕司 気候変動枠組条約と京都議定書についての考察  
 福澤 彩子 「日本の環境政策における直接規制の経済的評価」  
 松嶋 明子 「総量規制と公健法によるSOX削減効果—  
 —家電リサイクル・システムのLCA分析—」  
 三宅 良尚 「家電リサイクル料金の評価を中心に—  
 —リサイクル料金の評価を中心に—」  
 森岡 ナナ 「介護保険法案の成立と今後の展開」  
 横山 史 「タイの電力開発—EGATを中心として—」

## 外国語コース

入江 智佳 中国語における外来語について

## 社会科学コース

- 小泊 瑠美子 「NPOにおけるリーダー育成の一考察」  
 起業者としてのNPOリーダー育成について  
 有賀 芳英 「犯罪人の引渡における主権と人権—最近の判決を題材にして—」  
 石川 友孝子 地方自治体による子育て支援事業—保育政策を中心に—  
 磯野 央子 アメリカのODA低下傾向の緩和に果たす登録NGOの役割—ナメリ  
 カ国際開発庁(USAID)予算に占めるNGO予算増大の視点から—

- 飯寺 純子 北欧神話とロマン主義  
 井上 朝弓美 現代日本における女性の就労と家事・育児の両立  
 白井 梓 現代日本社会と高齢者—高齢社会における居住形態の可能性—  
 小野 耕平 中国における少数民族統治政策と「中華民族圏」  
 —「グライ・ラマ」のストラスブルグ提案をめぐって—  
 小野 道信 辛亥革命に対する日本の反応  
 於保 ひとみ —阿部守太郎外務省政務局長暗殺事件を中心に—  
 喜屋武 淳平 高橋生のライフスタイルに関する日米比較  
 倉重 卓也 沖縄におけるアメリカ文化の影響  
 古賀 綾香 「エスニック・イメージ」といふもの—北欧サーミの事例から—  
 杉田 雅之 日清戦争開戦過程における政軍関係の考察  
 武部 泰明 「伊藤博文の大本営別席を中心として—  
 —ケガレと葬送儀礼—」  
 田中 裕子 景観論争にみる「京都の景観」  
 谷本 景子 在日朝鮮人の民族教育  
 東郷 佑衣 日本とフランスの幼稚園比較—園児と教師の関係のあり方を中心に—  
 柳楽 律子 「ウチナーンチュのアイデンティティの変容」  
 福谷 利香 アメリカの住宅地開発とコミュニティ形成  
 藤木 美帆 観光・イメージ・タイ王国  
 古川 由香里 「仏教文物の伝来と日朝関係—六、七世紀の場合—」  
 松下 真希 メンアメリカの宗教と神話について  
 宮田 真介 多様化するアメリカの家族  
 山本 美貴子 セルビア人の歴史認識と民族感情—歴史の語り部がスラヴから—  
 渡部 正人 占領期における一保守政治家の外交観—声田均を中心として—
- 佐藤 祐司 Divergences in Media Coverage in the Second Chechnya Conflict  
 (第二次チェチェン紛争におけるメディア報道の矛盾)  
 新庄 秀臣 A Comparison of The Learning Errors of First and Second Language English Phonologies  
 (英語音韻における、第一言語と第二言語のエラーの比較)  
 藤井 佐知子 The acquisition of English phonology: L1 Canadian child versus L2 Japanese children (英語の発音の獲得: L1のカナダ人の子供とL2の日本人の子供の比較について)  
 南 知仁 Green English - A Nativized Language-  
 (母語化した言語の研究) アイルランドの英語  
 「An Optimality-theoretic analysis of diphthongization in the history of Spanish」  
 (最適性理論によるスペイン語史での二重母音化に関する分析)  
 市場 友和 A Study of Dick Francis Enquiry  
 (ディック・フランシス「査問」の研究)  
 荻野 加奈子 A COMPARATIVE STUDY OF IMAGES OF DOGS AND CATS IN ENGLISH AND JAPANESE EXPLANATIONS  
 (英語と日本語の表現における犬と猫のイメージの対照研究)  
 甲斐 洋二郎 「A Study of Tim O'Brien - Focusing on Going After Cacciato, The Nuclear Age, and in the Lake of the Woods-  
 (ティム・オブライエン研究「カチアートを追って」  
 「ニエークリア・エイジ」森の湖で)を中心に」  
 金藤 悦子 Intercultural Communication in Japan: Aina Culture and Japanese Awareness (日本における異文化コミュニケーション—アイヌ文化と日本人の意識—)  
 嶋田 沙織 Miscommunication in Native and Normative English Conversation  
 「英語母国語話者と英語学習者の会話におけるミスコミュニケーションについて」  
 新名 直美 A Comparative Study of Communication Strategies by L2 Learners: Students Who Have Studied Abroad VS Students Who Have Studied in Japan (L2学習者のコミュニケーション方略使用に関する研究—留学生経験者と留学未経験者の比較—)  
 土肥 由紀美 「The Gentleman in Great Expectations」  
 (大いなる遺産にみられるジェントルマン像)。

杉野 西 Amusements and the Working Class (労働者階級の娯楽)  
 深水 桃子 How We Talk About Animals: A Study of Proverbs and Other Sayings in English and Japanese  
 (日英のことわざにおける動物観の比較)  
 松田 理恵子 A Study of English Sound Changes in Listening by Japanese Students  
 (日本人学生の英語リスニングにおける音変化についての研究)

## 数理情報科学コース

江川 伸洋 オブジェクト指向言語JAVによる木データ構造の処理  
 高木 俊和 渋い色を選択するためのカラーパレットの作成  
 安水 洋介 ネットワークセキュリティと暗号化  
 カオスニューロン素子を用いた信号処理の可能性  
 テクニカル画像解析の研究  
 遠藤 潤一 交通渋滞における動粘度波の研究  
 鎌田 浩司 楕円曲線を用いた暗号系について  
 黒川 雅臣 リカレントニューラルネットワークに現れる複雑なダイナミクスの解析  
 國母 隆一 組み型コンソールソフトウェアにおけるオンラインオンジョブ更新の考察  
 後藤 徹平 「プランニング機構に着目したエージェントの構築に関する考察」  
 杉原 大悟 「計画型問題における強化学習について」  
 築地 聡子 Bezier曲線の曲率変化に関する考察  
 西 恒一郎 Schemeによるシステムの組織化について  
 福田 英洋 統計的物体同定の研究  
 藤原 真 関数型言語MLについての研究  
 分散処理システム設計のためのデータフロー解析  
 古川 忠恵 画像データの正規化変換とフィルタリング  
 星山 幸子 形状認識のための特徴線抽出法  
 松尾 美咲 反応系の数理  
 三河 聖 システムパラメータの切替によるカオス応答素子の動力的特性  
 三木 隆史 システムパラメータの切替によるカオス応答素子の動力的特性  
 渡邊 晃 伝染病に関する数理モデル

## 物質生命科学コース

有村 大士 マイクロアレイのデータ解析ソフトウェアの開発  
 池田 佳史 アフリカツメガエルの変態における細胞死の定量的研究  
 新垣 元樹 高分子の核生成における誘導期のメカニズム  
 シロアヒアゲハおよびギフチョウの成虫翅面上における鱗粉の分布と配列パターン  
 池田 貫 IC中央飛跡検出器の性能試験における位置分解能の評価  
 後藤 隆一 染色体外遺伝因子の複製と安定な保持には、核マトリックス結合領域の機能に関する研究  
 坂本 悠 ナノ構造化グラファイトの水素化特性  
 田出 匡志 ギフチョウ幼虫の食草選択性についてー真性の分化と生物系統地理  
 田邊 和久 ラット小脳一酸化窒素合成酵素の反応機構の研究  
 新見 大輔 ホール輸送性物質の合成と有機イオン素子への応用  
 丹羽 淑恵 リン脂質DPPC水エタノール三元系複雑流体の構造相転移の研究  
 信藤 秀和 新しいメカニズムの構造と水素化特性  
 羽藤 隆夫 クォーク伝播関数の数値シミュレーション  
 花田 信子 共役勾配法による電子状態の最適化の研究  
 原田 晶子 ギフチョウにおけるミトコンドリアND5遺伝子のスニップス  
 久松 光 (一塩基多型) について  
 松永 雄三 ウナギの脳の組織学と神経組織化学  
 村上 千尋 傷痍マツの樹体成分研究  
 山本 健太 スギナフェレドキシン(2)の電子伝達活性におけるL依存性  
 吉田 健吾 ラジカル依存性ペプチド結合切断による蛋白質相互作用の解析  
 若槻 均 ステロイドホルモン生合成の活性化におけるSARタンパク質の役割

## 自然環境研究コース

石井 康彦 土砂移動現象の発生・流動・堆積に及ぼす樹林帯の影響度に関する研究  
 石垣 宏 LANDSAT-TMデータによる松枯れ被害地域の分布、およびその時系列変化の推定  
 船尾 真悟 GPR法による水分測定的基础研究  
 大浦 哲 汚水の窒素除去における微生物担体の役割

兼子 伸吾 帝釈峡における稀少植物の保全生態学的研究  
 茂田 幸嗣 広島県の中山間地域における森林構造とその管理手法  
 鈴木 浩司 天然水試料中のカルボニル化合物の定量  
 辻 浩司 ラミィカミキリの個体群生態学的研究  
 仲尾 晋真 公共空間におけるごみの散乱および分別に関する実地調査と解析  
 仲尾 晋真 森林植生による土砂災害防止機能の向上政策における経済分析、(1996.6.9)広島県豪雨災害の被災地について  
 水山 啓一 事務系ソフトウェアの日常活動における効果的な環境負荷削減のための研究  
 鍋島 孝男 広島の花崗岩類地帯における土砂移動現象の発生頻度に関する研究  
 橋本 純子 都市公園の環境・生態学的評価  
 堀田 早登志 山火事跡地流域における植栽木の成長とそれに及ぼす水分と養分環境の影響  
 松橋 和哉 異なる環境条件下に生育するアカマツ細根の深度分布  
 幸田 賢一郎 モンキチョウの寄主範囲と産卵刺激物質に関する研究  
 山口 悠哉 対馬北部比田勝付近の第三紀堆積物と堆積構造について  
 吉川 拓夫 プロトプラストにおけるセルロース合成の研究  
 吉川 宏和 ブナ科稚樹の生長と環境要因の検討  
 龍門 尚徳 アカマツ葉面のクチクラワックスの構造と成分  
 田島 隆直 アゲハチョウ類の採餌行動解離因子に関する研究  
 渡辺 倫夫 広島湾周辺におけるノニルフェノールの動態

## 生体行動科学コース

岡本 僚 鳥類のニューロステロイド合成における内分泌擾乱物質の影響  
 後藤 有里 視覚イメージの注視における脳電位反応  
 末廣 真妃 単語の心像性効果ERPによる研究  
 井上 裕美 高齢者ステレオタイプに関する研究  
 岩崎 多恵子 移行を伴う集団認知の観点からー適切なサポートレベルについての検討  
 内田 千春 音楽聴取が起床時の睡眠慣性に及ぼす効果の検討  
 海野 由香 海水ウナギの心房における拍動調節・浸透圧と種々のペプチドの影響  
 岡部 晋平 独自性欲求の個人差が集団間状況における独自性評価に及ぼす影響  
 小川 景子 レム睡眠期の眼球運動と夢見の関連性  
 奥原 啓輔 鳥類の脳が合成するニューロステロイドによるニューロン活動制御

金子 弘 モルモットMOP1αの結晶化への試み  
 河本 淳子 増幅した遺伝子領域から転写されたtrans転写産物の細胞核内での挙動に関する研究  
 小谷 茂之 スギナフェレドキシン(SiF)の電子伝達活性に重要なアミノ酸残基  
 洪屋 佳因 自発的視覚探索における絵画刺激の認知情報処理  
 下平 美香 トリプテリルによる副腎皮質ホルモン合成の阻害作用  
 庄司 智子 暑熱下の環境照度の違いが仮眠効果に及ぼす影響  
 高取 直志 暑熱環境下での運動中における水分摂取の間隔が体温調節反応に及ぼす影響  
 高原 円 事象関連電位によるREM睡眠中の情報処理過程の検討  
 土橋 友美 運動学習におけるモデリングとメンタルプラクティスの効果  
 富水 あゆ美 誤情報フィードバックが運動学習に及ぼす影響  
 中島 由紀子 音楽の曲想と外向性次元が情動反応に及ぼす影響  
 中田 麻衣子 酵母SCV家族タンパク質の2量体形成とその接合部位の解析  
 菜花 真一 アフリカツメガエルの変態における細胞死の組織学的研究  
 橋口 大輔 歩行中のエネルギー消費量に及ぼす傾斜角と歩幅変化の影響  
 前田 和寛 望ましい自己と現実自己・反映的自己との不一致が精神的健康に及ぼす影響  
 松浦 倫子 習慣に基づいた自己覚醒の精神生理学的研究  
 三浦 由理 哺乳動物複製系からなる染色体外遺伝因子の細胞内動態に関する研究  
 水口 絵里 親密な関係におけるサポート取得の排他性の研究  
 三好 優子 ツメガエルの転移性配列Xミのゲノムにおける存在様式の研究  
 村上 由紀 勢力の知覚がジェンダーステレオタイプの使用に及ぼす影響  
 森田 久美子 抑うつにおける認知バイアスの検討  
 脇 真司 ジャパンヘッドの動作解析  
 渡邊 陽 音楽がエピソード記憶想起に及ぼす影響

(編集 梶原忠輔)

# 読者からの声

## 「やっぱ飛翔でしょ」

総科一二生  
山根阿樹

まずは飛翔六十号をバラバラとくつめてみる。まず気付くのが、学生の筆による記事が結構多い、ということである。きちんとした記事から、何気ない一言まで様々だ。

飛翔は自分達の先輩が何をしているか、そして何を思っているかを知ることが出来る数少ない手段のひとつだと思っ。

不幸にも総科に親しい先輩がいない場合（ほかならぬ私がそうっぽい）、自分達より前に総科にやって来た人たちが、何を思い、何をしているかという事を知るのには難しい。

一方、先輩方に恵まれている人にとつても、ページをバラバラとめくっただけでいろんな話を聞くことができるというのは、得がたいことだと思っ。そんな学生時代の参考書とでも言える飛翔が、今自分のすぐ横に置いてある。これは至上の贅沢かもしれない。

また、研究室紹介では、先生方の研究がわかりやすく紹介され、先生方の個性などや、学生たちからのアドバイスも書かれている。飛翔編集委員の方々には、このようなすばらしい学部広報誌を、今後も世に送りつづけてほしい。

## 「なぜ飛翔は読まれないのか」

総科一二生 井手 友紀子

その内容を見る限り、飛翔は総科独自の広報誌としての役割を十二分に果たしていると思えます。毎回ページが設定されている「研究室紹介」は他の手段では手に入りにくい縦の情報を、また様々な企画モノは総科という自分が所属する生活圏を知るのに、よいツールとなっているはずだ。

ただ残念ながら、学生の読者の中で、飛翔をうまく活用している人は少ないように思えます。内容にじっくり目を通すことも少なく、飛翔の内容が話題にのぼることも少ない。

その原因としては次の二点があげられると思います。

まず飛翔が配られる機会が、新入生にはガイダンス、在学生には大勢の総科生が集まる偶然（今回は超域研究の講義でした）と安定していない。また事務には飛翔を常備しているものの、それ以外にいつもここに置いてあるという「飛翔のスペース」がない。その結果「この時にこの人から飛翔が配られる」「この場所にいけば飛翔が

ある」というように意識の中で特定の時間・人・場所に結びついて認識されないため、もらったらもらった時点で忘れてしまいがちになる点があります。

次に、飛翔の記事に関する話題、批判、噂やつっこみなどが現れてこないのは、他人もまた同じ記事を読み、同じ情報を共有しているという共通認識が形成されていないためだと思っます。これは情報一般に対する総科生の全般的な不感症が下地になっているとも言えますが、同時に飛翔編集部自身の「読んでもらおう、飛翔というツールを媒介にしてひとつの総科情報圏をつくってほしい」という野心・ビジョンの薄いことがその遠因と思われるます。

結論として、読者と編集部双方が飛翔というシステムをもっと有効利用しようという明確な意識をもつべきだと思っます。（Q・E・D）